**仕える喜び   2016 08 07**

**Luke 12: 32-40 Pr. H. Adachi**

主の恵みと平安が会衆の心の中にしみわたりますよう

私の祖母は、ちょっと常識的ではないような面もある、おもしろい信仰者だった。　非常識位に、仕えることを喜びとしていた。　兄は、おばあちゃんは、キリスト教でなくて、食え食え教だといっていた。　料理をたくさん作ってもてなすのことを本当に楽しみにしていた。　祖母は、私が小学生のころは、父の兄である叔父の家に住んでいたが、末っ子の私の父の家にもよく泊まりにきた。

夏の暑い夜は、祖母が家に泊まる部屋は、寝ている横の窓、とても大きいまどだが、いつも鍵はかけられない網戸のまま、寝ていた。　子供ながらに、わたしは、「おばあちゃん、網戸なんかのままで寝て、泥棒がきたらどうするの？簡単に入ってこられちゃうじゃない。」　と質問したことがあった。

すると、祖母は「だいじょうぶよ。泥棒が来ても、「いらっしゃいませ、この家には盗むものなんかないけど、冷えているビールとおいしいつまみがありますから、どうぞ入って、一杯やっていってください。」と言うから」と話してくれた。よく考えると、泥棒が、入ろうとした家から、いらっしゃいませ、どうぞビールを飲んでなんて言われたらどうするだろうと考えた。　しかし、普通じゃ考えられないと思った。

さて、与えられた福音書、ルカ12章の32節から40節だが、ちょっと、普通では考えられないたとえ話も出てきているように思う。　今日の箇所、祖母が泥棒が来たらどうするかという話しをしたところなので、最後の39節から40節にあるたとえ話から入っていこう。　そこには、泥棒が来るのを警戒する主人のたとえが書かれている。

泥棒がいつくるかわかっていたら、主人は決して、泥棒を入らせないだろう。　泥棒がいつくるかわからないため、いつも警戒している家の主人がそうであるように、いつ、人の子が来ても良いように警戒していなさい。常識的ではない、泥棒にいらっしゃい、といってしまう祖母とはちがって、泥棒がいつくるかわからないから警戒しなさい、というたとえは常識的に思える。

そして少しさかのぼって、36節から38節に注目したい。こちらの話はいわば常識ではないように思う。主人が婚宴披露宴からもどってくるのを待つ、仕え人たちのたとえだ。　仕え人たちにとって、婚宴からいったいいつになったら、主人が帰ってくるのだか、わからない。　当時は、携帯電話もないから途中から連絡なんかできない。　また婚宴会場だって、歩いたり、馬車に乗ったとしても、とんでもない時間がかかるところまで行っていたかもしれない。

だから仕え人たちは待ちに待って、そして、長旅で疲れた主人が帰ってきたら、いつでも主人に仕えることができるようにするもんだ。　という話なのではないかと想像するのだが、ここで、このたとえ話に書いてあることは、普通ではないのだ。

仕えようと、腰に帯をしめて待っていた僕たちに対して、この主人はなんと、逆に主人が腰に帯をしめて、僕たちのために、仕えて給仕をしてくださるという話なのだ。　なんだか常識的には、考えにくいご主人様だと思う。

さて、ここで、イエスが語ったたとえ話で、「主人が帰ってくる。」とか「人の子がくる。」というたとえは、いったい何を意味しているのだろうか？　いわゆる、キリストの再臨であり、それは、人々は、この世の終わりだとか、あるいは、一人一人のこの世の命が終わる時ということを考えてきた。

そこには、当時のユダヤ教を信じていた人々にとっては、律法がすべてだった。そして裁きが待ち構えているのではないかと、想像しがちだったのではないかと思う。それに対して、イエス様は、そんなことはない、この世の人生が終わったとき、裁きがありとんでもない重労働に仕えなくてはならないというのは逆に、赦されて、主のおもてなし、サービスを受けることができますよ。　とイエスは言ってくださっている。

今日の聖書の箇所には、「恐れるな、小さな群れよ。」という言葉で始まっている。　それはこの世の命の終わりに向かって生きていることを恐れる必要なんかないのですよ。　イエス様自身が、わたしが来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためにきたとおっしゃってくださった。　神さまご自身が人に仕えることを喜びとしてくださる。　それは、私たちが仕えられることを喜ぶというのではなく、イエスが仕えることを喜びとしていることを深く深く、受け取る必要がある。英語では礼拝はサービス、仕えること。その主語は、私たち人間だと思われている。そのような考えは正しいと思う。しかし、人間が仕えると同時に、天国での出来事を、神が先取りして、神が仕えてくださっている面も礼拝の中にある。

主の仕える喜びをじっくり考え、思いをめぐらせるとき、この世における主の御言葉を信じる歩みが変わってくるのではないだろうか。現在生きている世の中は、なんとなく希望が持てないと感じている方も多い。皆さんのなかには、トランプ氏が大統領になってもらいたいという方もいるだろう。しかし、多くの移民にとって、それはヨーロッパから移民した方々またその子孫の中にだって、トランプ氏が大統領になったら、もう生まれた国に帰るとか、あるいはカナダの移住すると考えている方がいると聞く。

しかし、将来なにがおこるかわからない、不安定な世の中であろうが、たとえ明日泥棒に入られようが、イエスキリストの御言葉を信じ歩むことに常に希望がある。主イエスは喜んで語ってくださっている。「恐れることはない、小さな群れよ。　私が世の終わりにも仕えるから。」

アーメン